

総合学習「ハンゲルを学ぼう」授業実践報告

白川尚志

1. はじめに

この小稿では、私が2008年度に学習院高等科2年生を対象として「ハンゲルを学ぼう」というタイトルで行った総合学習の授業実践を報告する。

私は英語教員であり、専門は英語教育である。まずは英語教員であるこの私が、なぜ「ハンゲルを学ぼう」という授業を行ったのかについて触れておくべきであろう。今から約8年前、私は趣味として韓国語の学習を始めた。何となく隣国の言葉を学んでみたかったからと、自分自身が新たな外国語を学んでみることで英語の授業の改善につながるのではと考えたからである。最初は書店で買った参考書を読みながら細々と独学で学んでいたが、やるからには本格的に学ぼうと思い、夏休みを利用してソウルへ語学研修に出かけたり、帰国後は民団（在日本大韓国民団）の運営する韓国語教室に通ったり、その後も度々韓国に出かけたりするようになった。おかげで韓国人の友人が多くでき、韓国社会や文化について多くのことを学べた上、2004年には韓国語能力試験の最上級の6級を、2005年には朝鮮語の通訳案内業の免許をそれぞれ取得することもできた。もはや専門外という批判を受けることはないと思い、第一の専門である英語に加え、いわば第二の専門として韓国語や韓国文化をテーマとした授業に挑戦してみようと思ったのである。

選択科目については前年度の12月に受講者が決定するのであるが、「ハンゲルを学ぼう」を選んでくれた生徒はわずか3名であった。予想していたよりも人数が少なくて残念ではあったが、3人ならばきめ細かい指導ができるし、少人数ゆえのフットワークの軽さを生かして校外学習に気軽に行かれる上、自分を含めたら4人なので韓国料理を食べにいった時には一番うまくテーブルを囲める人数ではないかと前向きに考えることにした。また、この授業が第一希望でない生徒が含まれることも心配であったが、1年という長い付き合いなのだから真剣に取り組んでもらうことは期待しつつも、楽しく学べるように授業を行うことが第一だと考え、あまり気負わずにやっつけていこうと考えた。

振り返ってみれば、何もかもが初めての試みであり、手探りで毎回の授業をこなしていたとは思いますが、今では1年間の授業を終えて一仕事終えたという充実感で満たされている。この小稿では、1年にわたってどのような授業を行ってきたかを紹介し、授業実践を通じて学んだことや反省点などについても述べていこうと思う。

2. 授業計画

「ハングルを学ぼう」では、タイトルから連想されるものとは異なるが、韓国語のみならず韓国文化や韓国事情も扱うことにした。但し通常の英語の授業のように外国語によるコミュニケーション能力を身につけることを目的としたり、社会の授業のように韓国文化・事情についての紹介や講義で終わったりしては、総合学習の理念に合わなくなってしまう。そこで「ハングルを学ぼう」をいかにして総合学習の授業にするかが、最初の大きな課題であった。

当時施行されていた文部科学省（2003）の高等学校学習指導要領総則には、総合的な学習の時間について次のような指針が示されている。

- 1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。
- 2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。
 - (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
 - (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

(中 略)
- 5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。
 - (1) 自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
 - (2) グループ学習や個人研究などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

(下線は引用者による)

私は指導要領の指針に示されている「横断的・総合的な学習」「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え」「問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む」「体験的な学習、問題解決的な学習」「地域の教材や学習環境の積極的な活用」などの理念を尊重した授業計画を立てることにした。

韓国語については、たった週1度の授業でまともに習得できないのは明らかである。そこで暗記学習などを通して韓国語を習得することを目指すのではなく、単語カードなどを見ながらごく簡単な読み書きや対話をするなどの活動を通じて、韓国文化の1つとしての

韓国語をいわば「体験する」ことを目標とした。また、韓国語は語彙や文法が日本語とよく似ており習得が比較的容易な言語と言われるが、簡単な読み書きを通じて韓国語と日本語との類似点や相違点を探り、言語意識を高めていくことも目標とすることにした。そしてできることであれば、教室で学んだ韓国語の表現を、校外学習で韓国人に対して実際に使ってみる機会を設けて、「通じた」という達成感を味わってもらうと共に、異文化交流を実践できればとも考えた。

韓国文化・事情については、韓国の伝統文化や現代事情に関する様々なテーマを「横断的・総合的」に考察することを通じて、異文化を偏見や先入観に捉われずに理解する能力を高めることを目標にした。青木（2003）はエドワード・サイードの言う異文化に対するオリエンタリズム的な態度が日本のアジアに対する態度に表れていることを指摘し、韓国については「近代の日本人にとって韓国文化は好奇心の対象にはなってもまともな異文化として理解の対象にはならなかった」（p. 96）と述べている。私は韓国文化や韓国事情、また日韓関係などに対する表層的な好奇心レベルから一歩進めて、相対的な視点から韓国文化を捉える作業を行うことにより、異文化をステレオタイプで捉えることの問題を理解させ、異質のものを受け入れる寛容さや、自民族中心主義に陥らない態度を身につけさせたいと考えた。このような教育実践は、いわば「国際理解教育」を韓国文化・事情を題材として行うものと言ってよいであろう。また、体験的に学べるよう校外学習の機会を設け、韓国人から直接話を聞き韓国文化に直接触れるなど「地域の教材や学習環境」を積極的に活用し、受講者「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考える」ことができるよう、受講者各自でテーマを設定し、文献を調査し考察を加え、口頭発表を行いレポートを書くといった活動を含めていくことにした。

授業のタイトルについては、最初はオーソドックスに「韓国語・韓国文化入門」とする予定であったが、この授業では韓国を中心に据えはするものの北朝鮮や在日コリアンも扱っていく予定であり、またNHKの語学講座では政治的な理由から「ハングル講座」という名称にしていることからそれを真似して「ハングル」という名称を用いることにした。そして親しみやすさを持たせるために「学ぼう」をつけ足し、「ハングルの学ぼう」というタイトルに決めた。

以上を総合し、前年度10月に学習院高等科1・2年生に配布した『選択の手引き』には、以下のシラバスを掲載した。

○ハングルの学ぼう（白川）

韓国は日本の隣国であり多くの人が両国を往来している。また日本には多くの在日韓国人や留学生が暮らしており、日本にとって最も関係の深い国の一つと言える。ところが日本では、残念なことに韓国語や韓国文化について学ぶ人が少ないのが実情である。

この授業は、韓国語入門と韓国文化入門の2本柱で行う。韓国語はハングル文字の

読み書きから始め、1年後には日常的な事柄を簡単な文を用いて表現したり、理解したりできるようになることを目指す。韓国文化入門では、韓国の伝統文化や韓国人の価値観・考え方などを考察していく。日本と韓国は類似点も多いが、相違点も多い。韓国人はなぜ割り勘をしないのか、なぜ辛いものが好きなのか、といった日常的なテーマから、韓国ドラマからどのような韓国の姿が見えてくるか、韓国人は日本をどのように捉えているか、といったテーマまで扱っていきたい。

隣国の言語と文化に対する理解を深めることを通じて、日本語や日本文化を相対的に捉える視点を獲得するとともに、異文化理解能力を高めることが、この授業の究極的に目指すところである。

そして授業開始直前の前年度の3月には、大枠となる授業の方針を次のように決めた。授業の配置については、学習院高等科の総合学習の授業は毎週火曜日の5・6限の2コマ連続授業なので、5限目で韓国語を扱い、6限目で韓国文化・韓国事情を扱うことにした。

韓国語については『チャレンジ韓国語』（白水社）という市販の韓国語入門レベルの教科書に沿って進めていき、1年間でなんとか全14課を読み通してしまおうと考えた。また理解を深めるために、教科書付属のワークブックも用いることにした。ただし、総合学習の理念を尊重するため一切テストによる評価はせず、その代わりに授業での取り組み具合や貢献度を評価することにした。

韓国文化・事情については、学期ごとに以下のテーマを立てて進めていくことにした。

- 1 学期：韓国文化・事情の考察
- 2 学期：日本との関係の考察（韓国・在日コリアン・北朝鮮）
- 3 学期：受講者各自が設定したテーマの考察

授業では私から韓国文化・事情の理解のカギとなる基本概念や考え方を映像を交えながら紹介し、それを基に授業中にディスカッションしたり、受講者自らテーマを設定しレポートを執筆したりする方式をとることにした。またレポートは、論文スタイルの文章の執筆を求めることとし、幸いにも受講者が少ないことから、参考文献の収集の仕方や、段落の構成の仕方など、丁寧な論文指導を行うことにした。

また評価については、各学期末の長文レポートを特に重視することにし、小レポートや授業における貢献度や提出物の期限を遵守しているかなども評価の観点に含めることにした。

3. 授業実践

次に、実際に授業をどのように進めていったかについて、学期毎に振り返っていきたい。

1 学期（全 9 回）

1 学期の授業内容をまとめると、表 1 のようになる。

韓国語については、ハングル文字の読み方から始め、身の回りの単語やあいさつなどの定型表現、そして「…は～です」「～があります・います」といった基本的な文を扱っていった。また文字の読み方を覚え、慣れるのは大変時間のかかる作業なので、単語を読みながら繰り返し練習させることにした。基本的には教科書に沿って授業を進めていったが、必要に応じてハングル文字の上にカタカナのルビを振ったプリントを用意して文字の負担を減らして単語や文の練習をしたり、単語カードを使って例文を作ってみたりするなどの活動も行った。また日本語との類似性（「は」と「が」の区別があることや、漢字語を用いること）にも興味を向けさせることも、できるだけ意識して行った。総じて復習の活動を多く設けたため、当初の予定では 1 学期に教科書の 7 課まで進むつもりでいたが、6 課で終えることとなった。

韓国文化・事情については、第 1 回の授業でのイントロダクションを経て、第 2・3 回の授業で、韓国文化の理解のカギとなる家・家族やその背景となる儒教思想¹についておさえておき、第 4 回以降の授業では儒教思想が韓国文化や韓国事情にどのように反映されているかを考察していくという活動を行っていった。具体的には、韓国のテレビドラマに見られる人間関係を儒教思想の観点から考察したり、いかにも韓国らしいニュース記事や、韓国の英語教育熱やシャーマニズムなどを考察したりしながら、儒教思想が現代韓国にどのように映し出されているかについて受講者と考えていくなどした。また中間試験のすぐ後の第 5 回の授業では、校外学習として新大久保のコリアンタウンに出かけ、韓国料理店でランチを食べ、韓国の食材や雑貨を扱うスーパーや、民芸品店や民族楽器店を訪ねて、韓国文化に直に触れ、韓国人と接する機会を設けた。但し、韓国の雰囲気を楽しむだけで終わってしまうのではなく、授業で学んだハングル文字の読み方を思い出しながら街中のハングルで書かれた看板の文字を読んだり、立ち寄った店で説明や案内などをさせていただき韓国人に韓国語で挨拶してみたり、また韓国文化の授業で学んだ儒教思想の要素がコリアンタウンで発見できるか、といったことも考えたりしながら散策し、翌週に「コリアンタウン訪問の感想および考察」として小レポート（1000 字）を提出させた。

評価の最大のポイントとなる学期末のレポートについては、締切を 7 月中旬に設け、その約 1 ヶ月前の 6 月上旬の第 7 回の授業でテーマを発表し、期末試験期間を除いた約 2 週間で準備できるようにした。字数は 2000 字とし、テーマは次のように設定した。

¹儒教思想については、小倉（1998；2001）のは理気二元論の考察を中心に検討していった。

回	日付	授 業 内 容	
		韓 国 語	文化・事情
1	4/15	(教科書は使わず) ・文字の読み方(子音・母音) (子音は平音・激音, 母音は単純母音) ・簡単な名詞. ・文字カードを使って反復練習 ・ハングルで自分の名前を書いてみる	韓国文化のイントロダクション ・自分と韓国のかかわりの紹介. ・韓国観光公社の韓国紹介 DVD 鑑賞 気づいた点, 印象に残っている点を議論. ・朝鮮半島の地理・歴史の概要について
2	4/22	(教科書は使わず) ・文字の読み方(子音・母音) (子音は濃音, 母音は合成母音字母) ・単語カードを使った反復練習 ・パッチム(終末子音)を含んだ文字	韓国文化における家・家族 ・韓国の「姓」と「氏」, 本貫 ・韓国の家族関係の考察 ・フジテレビ「ノンフィクション『韓国に嫁いだ嫁たち』」の鑑賞.
3	5/13	教科書 2・3・4 課 ・単語の読み方の復習 ・パッチムを含んだ語の読み方 ・身のまわりのものの単語 ・挨拶などの決まり文句	韓国文化にみられる儒教思想 ・韓国の家族関係に見られる儒教思想 ・儒教思想の背景 ・理気二元論
4	5/20	教科書 5 課 「…は～です」(～은/는…입니다) 「…は～ですか?」「はい/いいえ」 (～이/는…입니까? 네 / 아뇨.) ・自己紹介の表現	韓国の TV ドラマに見られる儒教文化① ・韓国 KBS ドラマ「朧笑(お金の花)」前半鑑賞 ・ドラマに韓国の儒教文化がどう反映されているかについての考察
5	5/27	校外学習(新大久保コリアンタウン)	
6	6/3	小レポート(コリアンタウン訪問感想・考察)(1000字)提出	
		教科書 5 課の復習	韓国の TV ドラマに見られる儒教文化② ・韓国 KBS ドラマ「朧笑」の後半鑑賞 ・ドラマに韓国の儒教文化がどう見られるかについての議論
7	6/10	教科書 6 課 「～があります・います/ありません, いません」 (～이/가 있습니다 / 없습니다)	小レポートの返却, 1 学期レポート課題発表 現代韓国事情を知る① ・受講者各自がインターネットで探してきた韓国関連のニュース記事を紹介
8	6/24	教科書 6 課復習	現代韓国事情を知る② ・韓国の英語教育熱について ・NHK「英語キッズが未来を救う」鑑賞
9	7/1	これまでの総復習	現代韓国事情を知る③ ・韓国のシャーマニズム, 風水思想 ・韓国 KBS テレビ「VJ 特攻隊」鑑賞
	7/14	1 学期レポート(2000字)提出	

表 1: 2008 「ハングルを学ぼう」 1 学期授業内容

現代韓国事情に関するテーマを1つ設定し、文化論的な分析をなさい。

受講者3人はそれぞれ以下のテーマを設定し、私から適宜アドバイスを受けながらレポート執筆に取り組んだ。

- ・韓国製品にはなぜ「パクリ」が多いか
- ・韓国の子供の教育の変化について
- ・韓国で過熱する英語教育（キログアッパ²）について

それまでの小レポートはエッセイとして書かせていたが、学期末レポートについては文献を調べ適切に引用するといった論文スタイルで書かせることにし、必要に応じて中間指導を挟み文章の構成の仕方など技術的な指導を行った。同時に引用元を示さずに書物やインターネットから文章をコピーする剽窃行為は、カンニングに匹敵する重罪であることも強く指導した。またレポート提出の際には、自身を客観的に見つめてもらうために「自己評価シート」も合わせて提出させた。自己評価シートに記入させた内容は次の通りである。

- ・ どうしてこのテーマを選んだか。
- ・ このレポートの執筆にあたって、どのようなことをしたか。
- ・ このレポート執筆を通して、自分が学んだと思うことは何か。
- ・ 次にレポートを書くときは、どういうことに気をつけないといけないと思ったか。

この学期末レポートは、成績評価シートを添付して終業式の日 of ホームルームで学級担任に返却してもらった。成績評価シートは、レポートのテーマについての理解度、分析的視点、批判的視点、表現力、文章の中で気になった点、授業での取組度・貢献度についての私からのコメントと、学期の評点（100点満点）を記入したものである。学期末レポートが評価の要素の大半を占めることから受講者みな頑張ってきたと思うが、いくつかの課題も浮かんできた。引用元がインターネット上のブログだけで書籍に全く当たっていないことや、引用箇所を明確に示さず自分の言葉なのか他者の言葉なのか判別できないなどである。その辺りの指導を、2学期以降徹底しなくてはならないと感じた。

2 学期（全 10 回）

2 学期の授業内容をまとめると、表 2 のようになる。

²キログアッパとは、子女を海外留学させたために一人韓国に残され、稼いだ給料の大半を海外に仕送りし、たまに子女を訪ねに海外に出かける父親のことを指す。韓国の教育の過熱ぶりを象徴している。韓国語でキログは渡り鳥の「雁」、アッパは「父親」の意味。

回	日付	授 業 内 容	
		韓 国 語	文化・事情
10	9/2	1学期で学んだことの復習 (文字や単語の読み方や文法)	日韓関係① ・日韓友好の例のいくつかを見る。 ・対日対韓親密度調査結果を考察する。 ・アンビバレントな対日感情について。
11	9/9	教科書7課 ・疑問詞 (～は 何 / 誰 / どこですか) (～이/가 뭐/누구/어디 예요?) ・指示代名詞	日韓関係② ・「嫌日流」「嫌韓流」を読み、感想を話し合う。 ・嫌韓の理由、嫌日の理由は ・何のための「嫌日」「嫌韓」か?
12	9/16	教科書7課復習	日韓関係③ ・日韓関係はどうあるべきか。 ・韓国人との付き合い方はどうあるべきか
13	9/30	小レポート (日韓関係はどうあるべきか) (1000字) 提出	
		教科書8課 ・数字の読み方 (漢数詞, 固有数詞) ・曜日の言い方	在日コリアン① ・在日コリアンとは ・映画「パッチギ love & Peace」鑑賞
14	10/14	教科書8課 ・時刻の表現 ・個数の表現	在日コリアン② ・「在日特権」とは ・外国人地方参政権の問題, 国籍取得の問題
15	10/28	校外学習 (在日韓人歴史資料館)	
16	11/4	小レポート (資料館訪問の感想・考察) (1000字) 提出	
		教科書7・8課の復習	2学期レポート課題発表・説明 ・資料館訪問の感想を述べ合う。
17	11/11	教科書9課 ・日付の言い方 ・電話での会話表現	北朝鮮① ・北朝鮮の基礎知識 ・南北分断の歴史を振り返る ・北朝鮮に見られる儒教文化とは
18	11/18	韓国語スピーチコンテスト練習	北朝鮮② ・拉致問題, 国交正常化交渉, 日本人妻の問題, よど号事件, 帰国運動, 北朝鮮報道など。
19	11/25	教科書9課 ・位置, 方向の表現	レポート執筆指導 ・参考文献の探し方, 引用の仕方 ・自民族優越主義的な発想とは
	12/15	2学期レポート (2000字) 提出	

表2：2008「ハングルを学ぼう」2学期授業内容

韓国語については、当初の予定では1学期の続きで教科書の7課から始めて11課まで進むつもりでいたが、あまり急いで理解がおぼつかなくなるとは問題なのでペースを落とすことにしたため、結局9課までの3課分しか進まなかった。実際、受講者間で韓国語の力に大きな開きができてしまい、3人とは言え受講者のレベルにあった授業をするのに手

古摺ってしまった。各受講者のレベルに沿った個人指導型で行うか、あるいは受講者が互いに教え合うような共同学習型にするかなど、授業のたびに悩んでいたと思う。

また受講者の1人は独学で韓国語の学習を進めていたので、その年の12月に行われた神田外語大学主催の全国学生韓国語スピーチコンテストの高校生部門（朗読部門）に応募してみることにした。応募するからにはぜひ入賞させ、できれば優勝してソウルへの往復航空券を手に入れてもらいたいと思い、東京韓国学校で韓国人の先生にスピーチの指導を受けるなど入念な準備を行った結果、書類選考が通り本選出場を決め、実際に韓国語でスピーチをすることとなった。本番ではかなり緊張したせいもあり残念ながら入賞とはならなかったが、数多くの応募者がある中、わずか半年の韓国語学習で本選に出場できただけでも大健闘したと思うし、何よりも生徒本人の努力には敬服するばかりである。

韓国文化・事情に関しては、「日本との関係の考察」という大きなテーマの下、①韓国と日本の関係、②在日コリアンと日本の関係、③北朝鮮と日本の関係という3つのテーマに分けて授業を行った。

日韓関係については「韓流」や「嫌韓」といった言葉に反映されている日本人の韓国に対するイメージや、韓国人の対日感情などについて受講者とともに考えていった。当時話題になっていた「嫌韓流³」というキーワードの背景にある自民族優越主義や、韓国人が日本に対して抱く複雑な愛憎感情について考えながら、あるべき日韓関係とはどういったものかについて考察を行った。そして3回に及ぶ日韓関係についての授業後は、次のテーマの小レポート（1000字）を提出させた。

日本と韓国は隣国として付き合いがなくてはならないが、お互いに対する親近感とはそれほど高いとは言えないというデータがある。では、日本は韓国とどのように付き合いがいけばいいと思うか。何かすべきことはあるだろうか。また日本人は韓国人とどのように付き合いがいけばいいと思うか。うまく付き合いしていくために、私たち日本人がやるべきことや心しておくべきことはあるだろうか。

在日コリアンと日本の関係については、民団の方から頂いた『在日コリアンの歴史』（民団中央民族教育委員会編、2006）という教科書を読んだり、井筒正幸監督の映画『パッチギ Love & Peace』の一部を見せたりしながら在日コリアン社会を紹介し、在日コリアンのアイデンティティや、日本国籍取得や地方参政権の問題や、いわゆる在日特権とされるものについて考察していった。また中間試験直後には、校外学習として麻布十番の民団本部にある在日韓人歴史資料館を訪ね、展示物を見学したり資料館の方に話を伺ったりし

³嫌韓流は山野（2005、2006、2007）による造語。また山野の『マンガ嫌韓流』に対抗して『嫌日流』という本が韓国でヤン（2006）、キム（2007）によって執筆された。授業では、両者を読み比べて検討した。嫌韓流の人種主義・国家主義的性格については、板垣（2007）、朴・太田他（2006）参照。

た。そして翌週には、資料館を訪問した感想および自分で設定した1つのテーマについての考察を小レポート（1000字）として提出させた。

北朝鮮と日本の関係については、北朝鮮について概要を説明した後に、儒教思想から見た韓国との類似性について触れた後、1960年代の帰国運動や拉致問題や国交正常化交渉や、日本における北朝鮮報道のあり方など考察していった。

学期末レポート（2000字）のテーマは、次のようにした。

日本と韓国、日本と北朝鮮、あるいは在日コリアンと日本社会の間において懸念となっている事柄を1つ取り上げ、文化的・歴史的背景を交えつつ説明しなさい。そしてその懸念はどのように対処されるべきか、またわれわれ日本人にできることはあるか、について考察しなさい。

受講者3人はそれぞれ、以下のテーマを設定しレポート執筆に取り組んだ。

- ・在日コリアンの参政権
- ・北朝鮮による拉致事件の解決
- ・竹島問題

今回は1学期の反省を踏まえて学期末レポートの事前指導として、2学期最後の授業で図書館での文献の検索の仕方、文献の引用の仕方、文章の構成の仕方などについて改めて指導を行った。また自民族優越主義的な発想の問題点について改めて解説し、各受講者にこれまで自分が書いてきたレポートにそのような発想がなかったかどうか振り返らせ、学期末レポートではどう書いてくるか見守ることにした。書いてきたものを読むと、日本だけではなく相手の立場に立って考察した跡が見られる文章になっており、バランスよく記述しようと努力していることを伺わせてくれた。また1学期の学期末レポートに比べて、3人とも読みやすい文章になっており、引用の体裁もだいぶ良くなっていた。とはいうものの、十分に文献を読みこなさないで、思い込みを考察しているようにしか見えない記述が散見され、文献の読みこなし方の指導を3学期では重視していかななくてはと感じた。

またレポート提出の際、3学期に予定しているテーマ学習でどのようなことを調べたいかについて理由を含めてレポート用紙1枚に書いたものを、1学期と同様の自己評価シートと合わせて提出させた。ただし、1・2学期の学期末レポートの内容と重複するテーマは禁止した。各受講者が設定したテーマは次の通りである。

- ・在外コリアンについて
- ・韓国における日本文化受け入れ
- ・韓国における反日歴史教育について

3 学期 (全 4 回)

3 学期の授業内容をまとめると、表 3 のとおりになる。

韓国語については、2 学期の続きで教科書に沿って進め、丁寧な表現の語尾 (-하니다, 아/어요体) を用いた日常動作を表わす動詞 (行く, 来る, 食べるなど) を紹介した。また、3 学期最後の授業では、韓国語で簡単な自己紹介の文章を作り、発表を行った。結局教科書は 2 課分しか進まず、予定していたように教科書 1 冊を一通り読むことはできずに終わった。

韓国文化・事情に関しては、受講者の関心のあるテーマについて各自調べて学習するという方針で行った。2 学期末レポートの提出の際に申告してもらったテーマに従って、第 2 週からは各受講者にブックレポートをさせることにした。方法としてはそれぞれに関連文献のコピーを与え、各受講者は与えられた文献の内容についてまとめたレジюмеを作り、約 20 分でできるだけわかりやすい発表を週替わりで行うという形をとった。そして、各発表の最後にテーマに関連したディスカッションのトピックを述べてもらい、そのトピックについて受講者同士で意見交換をする活動を行った。発表後に感想を聞いてみると、みな相当緊張し、またうまく発表できなかつたと感じたようで、プレゼンテーションの難しさを知るいい経験となったようである。なお、私が各受講者に与えた文献は、以下の通りである

- (在外コリアン) 伊東順子 (2001) 『病としてのナショナリズム』
 (日本文化受け入れ) 土佐昌樹 (2004) 『変わる韓国, 変わらない韓国—グローバル時代の民族誌に向けて』
 (反日歴史教育) 三橋広夫 (2007) 『韓国の小学校歴史教科書—初等学校国定社

回	日付	授 業 内 容	
		韓 国 語	文化・事情
20	1/13	教科書 9 課の復習	3 学期の授業について説明 3 学期レポート課題発表 レポートの書き方の指導 (章立ての仕方)
21	1/20	教科書 10 課 ・動詞 (-하니다体) による日常動作の表現	ブックレポート① 「在外コリアン」
22	1/27	教科書 10 課 ・動詞 (-아/어요体) による日常動作の表現	ブックレポート② 「韓国の日本大衆文化受け入れ」
23	2/10	韓国語で自己紹介を書き発表	ブックレポート③ 「韓国における反日歴史教育」
	2/16	3 学期レポートの最初の 2000 字提出	
	3/12	3 学期レポート (4000 字) 提出	

表 3 : 2008 「ハングルを学ぼう」 3 学期授業内容

会・社会科探究（世界の教科書シリーズ）』、黒田勝弘（1999）
『韓国人の歴史観』

学期末レポートは、各受講者の設定したそれぞれのテーマについて論じるというもので、長さは1・2学期レポートの倍の4000字とした。なお中間指導として、レポートの最初の2000字を2月中旬に提出させて私からフィードバックを与えた後に、最終稿4000字を3月中旬に提出させる方式をとった。これは、締切ぎりぎりになって書き始めるということのを避けさせるとともに、大きな方向性や文章の展開など問題があった場合に修正が効くようにするためである。また、1年間にわたる授業の感想（1000字以上）も合わせて提出してもらった。まだまだ不十分な点はあるものの、1・2学期の学期末レポートに比べれば引用の仕方など論文としての体裁が整ってきてずいぶん読みやすくなり、なるほどと思わせるような鋭い考察も見られるようになった。文章力の点で最初はかなり心配させられた受講者についても、1年経つと随分成長するものだと感じた。

4. 授業を振り返って

以上1年間にわたる授業実践を報告したが、次に授業を振り返って良かった点や反省点などを考察していきたいと思う。受講者に提出してもらった1年間の授業に対する感想を引用しながら述べていきたいと思う。

授業全般については、次のような感想が見られた。

今ふとしてみると、教科書最後まで終わらなかったなあ、とちょっと残念そうに惜しみつつも、1年間韓国語・韓国文化を習ってみて、私は最高に楽しい時を過ごすことができました。先生には本当に感謝しています。

今まで受験科目を詰め込み式に勉強させられてきた私にとって、自分の頭で考え自分の気持ちを表現し広い教養が身につけられるという、こんな贅沢な勉強ができるのも学習院という恵まれた学校に行っているからだをつくづく思いました。

こうした感想を読んで、私は「ハングルを学ぼう」に挑戦して本当に良かったと思った。無論、私が読むこととこの紀要で引用する可能性があるということを承諾してもらった上で書いた感想なので、多少のお世辞が含まれているとは思いますが、素直に好意的に受け止めたいと思う。

韓国語の学習については、受講者間で大きなレベルの開きができてしまい、個々の生徒のレベルに対応した授業にする点で大変苦勞したし、自分自身あまりうまく指導ができなかったと思う。

私は授業が始まる以前に韓国語関連の本をちょっと読んだことがあったおかげか、ハングルはすぐに覚えることができ、教科書に出てきた単語や、あるいはそれ以外の単語も辞書を使ってたくさん覚えていくようになりました。

と書いた者もいれば、逆に、

初心者のじぶんにとって、韓国語の対話などはとても難しいものであった。単語もかなりの量があり、全く覚えることができなかった。覚えることは少なく、簡単な文法だけでもよかったので、もう少し進度を遅くしてもらい、完璧に少量でもマスターしたかった。

と書いた者もいた。急ぎすぎたために取り残されてしまう生徒がでは意味がないので進度を遅くしたつもりだが、それでも不満が残ってしまったようだ。この授業では、総合授業の理念を尊重して韓国文化の1つとしての韓国語を「体験する」ことを目的として、通常の語学学習のように暗記を求めない方針でいたが、ある程度は単語や文法などを暗記させた方が学びの達成感があるのかもしれない。しかし、韓国語を学んだという実感を得られなかった生徒にとっても、多少なりとも韓国語に触れた経験は、頭の片隅に残って将来何らかの形で役立つ時が来ると信じたい。

韓国文化・事情に関しては、次のような感想が見られた。

儒教から歴史、在日コリアンについてまで、今まで知らなかったこと、また知っていたつもりでも実際は正しくなかったことなど、本当に深く学んだなと思っています。

特に学んだこととしては、一方的な考え方はいけないという事を知った。授業を受ける前は韓国に対して良いイメージは無かった。むしろ悪いイメージの方が強かったと思う。しかし授業を受けていくことにつれて、韓国を色々な見方をすることを覚え、以前よりも色々なことを知ることができた。そのおかげで自分が偏見ばかりにとらわれていたことを知ることができたし、物事に対して主観的にみたり、客観的にみたりすることができるようになったと思う。このことは韓国の授業だけではなく、日常生活などにおいても大切なことだ。客観視することを覚えたのは人間的にもすごく成長できたのではないかと思い、とても嬉しかった。

最初はとても重いテーマばかりやっていると聞いていましたが、今ではその気持ちも少しはなくなりました。なぜなら、韓国語の授業で考えた「日本と韓国」の文化交流や戦争のことは少なからず自分のためになっていると思うし、世界中の人々が真剣に考えていかなければならないことだと思うからです。従って、今では本当に良い経験

をしたと思っております。

こうした感想を読んで、私は授業計画作成の段階から目論んでいた異文化理解能力を向上させるという目標は果たせたのではないかと感じる。生徒には「親韓」「嫌韓」といったムードレベルでの認識を脱却し、地に足をつけて韓国文化や韓国事情について学んでもらいたかったのである。今日はインターネット時代であり、サイバー空間では嫌韓ムードが強いが、こうした時代だからこそ情報を正しく読み取って、偏見や先入観にとらわれない異文化理解の態度を身につけなくてはならないのである。その目標が達成できたのだとするならば、この授業の意義は大きかったのではと思う。

また、レポート指導については次のような感想が見られた。

自分にとってレポートや課題の量が結構多かった。文字数も多く、他の総合の人たちに比べて多かった気もするので、もう少し課題やレポートなどを減らして欲しかった。

良くなかった点というより辛かったのは、何を置いてもレポートに関してです。文字数が今まで書いたことのないような文字数の指定なので、真剣に鬱になりました。書いても書いても文字数に到達しないときは諦めようかと毎回思いました。しかし、今までレポートを書いてきて少しはレポートを書く力がついたと思うので、それに関してはありがたく思っております。これで大学に行っても少しは安心できそうです。

確かにレポートの本数や字数は多かったと思う。1年間で大小レポート合計 11,000 字、原稿用紙にしたら 27.5 枚分のレポートを書いたのである。しかし2番目の受講者の感想にある通り、文章力が向上したという実感があるのならば、苦しくても意義ある活動だったのである。楽しく高い点数がとれる授業が良い授業なのではなく、学ぶことの多い授業が良い授業のはずである。私自身3回の小レポートや3回の学期末レポートを読んで、受講者の文章力が着実に上達していくのを感じることができた。各受講者とも大学入学後はレポートをたくさん書かされると思うが、この授業で養った文章執筆能力を土台にして優れたレポートや論文を書けるようになってくれれば、これほど嬉しいことはない。

またそのほかの感想としては、校外学習がとても印象深かったようである。

課外活動は特に印象に残りました。

百聞は一見にしかずというように、校外に出てもっと色々なことを自分の体で体験してみたかった。

一番楽しかったのは、なんといってもコリアタウンに行ったことです。僕はキムチな

どはあまり好きではなかったので味に対しての感想は微妙でしたが、あの時はご馳走していただき、ありがとうございます。(笑)

確かに実際に目で見て感じるということは必要なことだろう。結局2回しか校外学習を行わなかったが、あと1回くらいは校外学習の機会を設けてもよかったと今さらながら思う。

5. おわりに

この1年を振り返ってみると、授業の準備には相当な時間を要したし苦労も多かったが、実に楽しい時を過ごさせてもらったし、趣味で学んできた韓国語や韓国文化・事情をテーマに授業ができるというのは最高の幸せであった。英語の指導においてはコミュニケーション能力というスキルの向上が主要な目標で、ものの見方や考え方を指導する機会は少ないが、一方「ハングルを学ぼう」では偏見や先入観にとらわれずにいかに異文化を理解するかというものの見方・考え方を指導することが中心であったため、自分自身多くのことを学べた。このような総合授業をすることのできる学習院高等科で教鞭をとることができて本当に恵まれていると思う。また何よりも3人の受講者には、1年間私の授業についてきてくれたことに心から感謝したい。

この授業を通じて、英語教師として感じたことが1つある。それは、国際理解や異文化理解というテーマを英語教育の中で扱っていくのは、生易しいことではないということである。英語教育はしばしば国際理解や異文化理解とセットにして捉えられる。教科書や問題集には、異文化理解をテーマとした文章がよく見られる。しかし、そうした文章を授業で読んでいくことだけで異文化を理解する力が高まるとは、私には到底思えない。たとえば、日本で生活する外国人が日本で異文化体験を述べた文章を読めば、日本人が普段気付かないような日本の個別性や異質性を認識することにはなるだろう。しかしそこまでである。異文化理解はもっと深いレベルの話である。本当の意味での異文化理解とは、異質な者同士が違いを受け入れて共存していく態度の育成なのである。異文化について述べた文章を読むだけではそのような態度が育つには至らず、逆に英語文化 vs 日本文化という形で二項対立的に文化を捉える視点を身につけ、むしろステレオタイプの異文化の捉え方を増幅することで終わってしまうと思う。私は英語教育では最初から異文化理解の要素をできるだけ薄めるべきだと考えるが、言語は文化の一部であるから英語の場合やはり英語文化を無視するわけにはいかない。異文化を扱いながらも異文化理解能力を高めるに至らず、逆にステレオタイプで捉える異文化意識の増幅で終わってしまうような英語教育であるならば克服していかねばならないし、これは今後自分が探究していかなくてはならないテーマだと感じる。

韓国というテーマが、果たしてどれほど今時の高校生の興味をそそるかについてはよく分らないし、もしかしたら韓国に対してあまり関心のない生徒は結構多いのかもしれない

い。しかし、韓国にそれほど関心のない者でも知っておいてほしいことは、異文化理解や国際理解について思考訓練する上で韓国ほどよいテーマはない、ということである。そしてこうした思考訓練を通じて養う異文化理解能力は、近い将来日本に多くの移民や外国人労働者がやってきた時に出現する多文化社会において異なる価値観をもった人々が共存していく上で必要なものであり、言わば国際化の時代において必要不可欠な能力だということである。だいぶ種明かしをしてしまった感があるが、この授業実践報告を読んで「ハングルを学ぼう」ってなんか面白そうな授業をやっていたんじゃない、なんて思ってくれる者が一人でもいれば嬉しい限りである。今回の授業実践を土台にして、次回は大幅にグレードアップした「ハングルを学ぼう」を行いたいと思う。

参考文献

- 青木保 (2001) 『異文化理解』 岩波新書
 伊東順子 (2001) 『病としてのナショナリズム』 洋泉社新書
 板垣竜太 (2007) 『<嫌韓流>の解剖学 現代日本における人種主義—国民主義の構造』, 徐勝・黄盛彬・庵途由香 編 『「韓流」のうち外』 御茶ノ水書房所収 pp. 99-113
 小倉紀蔵 (1998) 『韓国は一個の哲学である…「理」と「気」の社会システム』 講談社現代新書
 小倉紀蔵 (2001) 『韓国人のしくみ…「理」と「気」で読み解く文化と社会』 講談社現代新書
 キム・ソンモ (2007) 『マンガ嫌日流』 晋遊舎
 黒田勝弘 (1999) 『韓国人の歴史観』 文春新書
 在日本大韓国民団中央民族教育委員会編 (2006) 『在日コリアンの歴史』 明石書店
 土佐昌樹 (2004) 『変わる韓国, 変わらない韓国—グローバル時代の民族誌に向けて』 洋泉社新書
 朴一・太田修他 (2006) 『「マンガ嫌韓流」のここがアタラメ』 コモンズ
 三橋広夫 (2007) 『韓国の小学校歴史教科書—初等学校国定社会・社会科探究 (世界の教科書シリーズ)』 明石書店
 文部科学省 (2003) 『高等学校学習指導要領 第1章 総則』
 [http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/001.htm 2009/05/15 アクセス]
 山野車輪 (2005) 『マンガ嫌韓流1』 晋遊舎
 山野車輪 (2006) 『マンガ嫌韓流2』 晋遊舎
 山野車輪 (2007) 『マンガ嫌韓流3』 晋遊舎
 ヤン・ビョンソル (2006) 『嫌日流』 有学書林